

TOP > 論文・レポート > 子ども未来紀行～学際的な研究・レポート・エッセイ～ > フィンランド訪問を通じたインクルーシブ教育の再確認

いいね! 79

ポスト

B!

キーワード検索



論文・レポート

Essay・Report

Google 提供



Find us on **facebook**

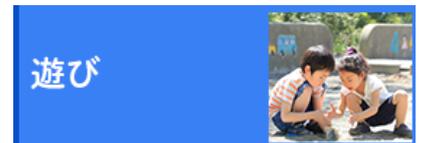
フィンランド訪問を通じたインクルーシブ教育の再確認

著者： 大庭 正宏（社会福祉法人陽光福祉会理事長、太陽の子保育園園長）

掲載日： 2018年11月16日掲載

カテゴリ： 子ども未来紀行～学際的な研究・レポート・エッセイ～ <特別支援教育>

関連キーワード： フィンランド, 大庭 正宏, 日本



インクルーシブ教育

インクルーシブ教育とは、障害のある生徒が普通学級で教育を受けることです。それは理想論だという意見もあります。障害のある生徒から個別支援の機会を奪うものであるという見方もあります。新しい概念ですので、様々な意見が出るのは当然のことだと思います。ただ、「インクルーシブ教育」という言葉の定義に、「障害のある生徒が普通学級で教育を受ける」という一文が含まれることは間違いありません。しかし、日本での学校教育を眺めていると、こんなシンプルなことなのに、自分の解釈が間違っているのではないかと不安になってきます。

2年に1度のフィンランド訪問は今回で4回目となります。今回も「インクルーシブ教育」の定義を再確認し、自分のプレを修正するための1週間になったと思います。

ユヴァスキュラにある小学校の一風景



写真は小学校での算数の授業風景です。訪問した小学校はユヴァスキュラ市内にある新しい学校で、授業は多目的ホールのような教室で行われていました。アクティブラーニングでの授業ということもありますが、見てわかる通り本当に自由な雰囲気です。はじめに簡単な説明、その後は課題演習と流れは普通でしたが、テキストに書き込む生徒、棚に並んでいるパソコンを取り出し課題をこなす生徒、壁に向かって一人黙々と取り組む生徒、何人かとワイワイ話し合いながら取り組む生徒と色々です。フィンランドの小学校訪問はこれまで何度も行っているので、この様子にそれほど驚きはありません。驚いたのは右側の写真に写っている男性教師の方です。今回この男性教師の方が学校内の案内や授業の説明などをしてくれたのですが、斬新なヘアスタイルとタトゥーは日本人の感覚からすると、教師からは一番遠い存在に見えます。とても感じの良い方で、様々な質問に対して真摯に答えてくれました。ただ、ヘアスタイルとタトゥーについての質問は遠慮しました。それは、聞きにくいということもあります



バックされ新たな研究に生かされるそうです。ユヴァスキュラ大学にて研究者の方とディスカッションをしたときにも、現場からのフィードバックの重要性を強調していました。学校にて特別支援教育の主導的立場にある特別支援教諭は、教員免許取得後、大学院にて特別支援教育に関する単位を取得することによってなれます。アカデミアとの繋がり強さは、特別支援教諭の多くが、教員として働いた後退職して単位を取得し、復職していることと関係があるかもしれません。

日本のインクルーシブ教育

私自身は学校教育の専門家でも、実践家でもありません。これまで小学生～高校生を対象とした学習塾に勤務し、現在は保育園にて働きながら学校教育というものを外側から眺めてきました。フィンランドの訪問も、インクルーシブな保育環境を構築するための視察が主な目的です。保育園は幼稚園とは異なり、契約ではなく措置で児童が入所するシステムであることもあり、入所児童を園で選択することは原則出来ません。そのため保育園は「障害のある生徒が普通学級で教育を受ける」という点においてはインクルーシブであると言えます。ただそれだけでは十分とは言えず、その質を向上させ、その先にある多様性を認め合う豊かな保育環境の構築を目標としています。このように外側の立場にいるからなのか、日本のインクルーシブ教育に対しては違和感を強く感じており、卒園児として学校に送り出す立場としてとても不安を感じています。

はじめにも述べたとおりインクルーシブ教育に対する考え方はいろいろあります。フィンランド国内でも、インクルーシブ教育に対して否定的な意見を聞くこともあります。ただ、インクルーシブ教育が「障害のある生徒が普通学級で教育を受ける」という意味であることを否定する人はいません。日本で感じる違和感は、この当たり前の定義が書き換わっていることです。日本でのインクルーシブ教育は、通常学級と特別支援学級を同じ敷地内に作るものが「基礎的環境整備」とされ、特別支援学級での個に合わせた指導が「合理的配慮」、そして障害児への合理的配慮を保障するため就学相談を通じて特別支援学級に措置されたりします。この「日本型インクルーシブ教育」はどう考えてもインクルーシブ教育ではありません。

インクルーシブ教育についての議論を進める前に、このインクルーシブ教育の定義を共通認識とすることが最も重要だということを、今回のフィンランド訪問でも強く感じました。

筆者プロフィール



大庭 正宏

小学生から高校生を対象とした学習塾の副代表を経て、現在は社会福祉法人陽光福祉会理事長兼太陽の子保育園園長。2012年より続けているフィンランドの保育園視察で学んだインクルーシブ保育をモデルに、東京都羽村市にて運営している2つの保育園にてその実践に取り組んでいる。さらに現在は、児童発達支援事業所である発達支援Kiitos羽村を通じ、インクルージョンを地域へと広げていけるよう活動を行っている。

関連キーワード：[フィンランド](#)、[大庭 正宏](#)、[日本](#)

いいね！ 79

ポスト



この記事の関連記事

- ➡ [何か変だよ、日本のインクルーシブ教育 \(1\)](#)
- ➡ [【フィンランド】フィンランドの幼児教育～保育園と小学校をつなぐエシコウル～（園・家庭での「学びに向かう力」各国事情⑤）](#)
- ➡ [すべての子どもとその家族を見守るフィンランドの「ネウボラ」](#)

論文・レポート新着記事

- ➡ 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その11：若い世代の描くライフデザインや出会いを考えるワーキンググループ
- ➡ 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その10：こども政策に関する国と地方の協議の場～こども政策の最前線は自治体～
- ➡ 【一人一人の違いに寄り添うために】 第12回 知識は無限、順位は有限

PAGE TOP

調査データ

- ▶ 乳幼児
- ▶ 小中高生
- ▶ 国際調査

▶ More

研究論文

- ▶ 異文化理解
- ▶ 健康と発達
- ▶ 学校教育
- ▶ 子どもの権利

▶ More

海外の子育て

- ▶ インド
- ▶ カナダ
- ▶ タイ
- ▶ ドイツ（ベルリン）
- ▶ ニュージーランド
- ▶ ノルウェー
- ▶ フィンランド
- ▶ サウジアラビア ▶ More

CRNについて

- ▶ ごあいさつ
- ▶ CRN概要
- ▶ 活動履歴
- ▶ CRN刊行物

▶ More

